

# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2026. 5



令和8年5月1日発行(毎月1回1日発行)第74巻第5号

No.816

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二六年 五月号 (通巻八一六号)

◇今月の二十首詠……俺の影 もとむらしげと 2

■作品 菊地栄子・河野繁子他 4

A 片倉ひろみ他 18

B 川合 進他 42

C 加藤はるみ他 54

A 藤野喜美子他 66

■オリープ集 綾 央子・石澤利夫他 34

◇今月の二人 鈴木いく子・伊東 裕 14

私と短歌との出会い (285) 設楽まゆみ 17

激情家・小野茂樹への親愛の念 13

■〈第一歌集を讀む〉38 坂上直美歌集『I c h』 28

―投げつけ投げ飛ばした青春― 関根和美

■遊覧寄港(手遊びゆうらん) 酒井 牧 32

■歌壇月旦 西堤啓子 33

公開講座・俵万智『サラダ記念日』

■三月号作品批評 58

A……上林節江・大寺智子

河上悦子・島根美智子

B……中村博子・八田暁美

C……河野繁子

オリープ集……三好聖三

十首選 土井谷恭子・佐藤 昌 41

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

靖子のへなちょこ指南 滝田靖子 53

藤森巳行歌会葬ご案内 ―一首募集― 53

最近の歌誌より (編集部・藤田) 40

第72回地中海全国大会(東京大会)のご案内 76

クリップ……75 神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

## 俺の影

### もとむらしげと

薄墨を引かれしごとき稜線の桜島浮かぶ錦江湾の冬

日の光清かに島を照らしおり人家は悉く海沿いに建つ

湾上に座して夕日の沈まざる揺るがぬ島は活きて火を噴く

春来たる喜びのあり幼子ときて川土手の土筆をさがす

梢より囁りのふる樹の下を白きスニーカーの子が歩みゆく

図書室に六人の子を連れゆきて本の林のなかで遊ばす

授業には意欲を見せぬ子の一人ページ繰りゆく横顔をみる

読みふける子らとありにし一時間窓辺の梅のつぼみに届く

一九五六年 鹿児島県生まれ

それいゆグループ所属

歌集『オカリナを吹き鳴らして』『よし

なしごと』他に『きまぐれ読書通信』

『番たちへ』がある

山鳩のくぐもる声が胸に沁む不意に終わりし母の晩年

垂乳根の淋しき面輪を映しけむ鏡に老いぬるわが顔映す

威張り屋と金の亡者の集まれる議事堂という非なる日常

政治には金がかかると開き直る政治家たちの志操は低し

徳治とくちなる語彙ごいを生徒に教えつつ今はと問われ即否みたり

戦争がもし起きたらと軽く言う若きら昼の談笑のとき

戦争をせぬ国したら勝てる国めざす国家像きみと異なる

核保有は安上がりという候補者がトップ当選被爆の国で

明け方に枕辺に来て坐りいる猫に呼ばれてうつつに戻る

傍らにしずかに我を見つめつつしのめどきに餌を待つ猫

廁かわやへも風呂へもついて来る猫を撫でつつ笑う俺の影かと

わが庇護のもとに暮らせる猫を撫づいつの日か来る永遠とわの別れは

# 作品 A

## 菊地 栄子

心緩み

・海

## 近藤 芳仙

浅間山

・信

午年に関わりおれば逢いたかり干支同じなる天国の父

「あなたは誰」聞いてしまいいし久し振り消防士姪のたくましき顔

この頃の切り身の魚の小ささよ亡き母肉より好みたる魚

蕎麦の具は隣の父に移しやり親子は黙って昼館を終えぬ

西風に向かいて歩む月明り丘の雑木林のたうつはげし

足元に吹かれて寄れる枯落葉手にあっけなく砕けて散れり

センターの利用者カード何時の間に無くすは老いの心緩みか

## 河野 繁子

手のひら

・雁

## 神田 鈴子

春

・大

娘が掃り一合の米研ぎながら哀しみひとつ手のひらに置く

配達の人足跡すぐに埋め小雪は数で積もりゆく雪

積雪の暗闇のなかひっそりと黄の花ねむり雪解けを待つ

オリンピックに飽きてチャンネル一つ変えイタリアの街杖なく歩く

こもり居の今日はテレビで街歩き古代遺跡を迷わず歩く

わが寿命神に委ねてくっすりと眠り目覚めて三日月仰ぐ

運と縁神の手のひらにころがされ大阪に生れ終り里山

夕空の浅間山は映えて溶岩に窪みし辺り赤く沈まず

黒斑山より蛇骨の峰を渡りゆき浅間火口の火炎見たる日

噴煙を赤く染めつつ立つ火炎ちろちろするがはつきりと見ゆ

地の底ゆくすぶり出づるエネルギー燃えていづれの方へ散れるや

とつふりと日暮れし浅間山を下りつつ一歩一歩に込める緊張

鳥も鹿も眠りをりしや木も草も無音となりし山径の闇

親しみし浅間山なれども夜の闇は無限泡影 山径を踏むのみ

蠟梅の香り仄かに漂ひてま昼の窓に小雪散らつく

恵方巻かぶる窓辺にちらちらと春を告ぐるか泡雪の舞ふ

今年また雪の降り積む二月八日 夫の在さぬ結婚記念日

りくりゆうの世界一なる金メダル見守るわれらも涙々に

国中を沸かし続けしオリンピック選手の明るき笑顔に終る

親友の手作りの雛飾りたり逝きてふた月春めける午後

来る年もまたこの雛を飾るべし友の心のこもる小雛を

「咲いている」思わず声のほとばしり集まる視線さえも梅の香  
一夜さに蠟梅ひらき花ざかりスマホをかざし人にまぎれ入る  
恵方巻色よく仕上げるリハールスローテンポに日を楽しむ  
オリンピックに廢物が棲むと人の言う廢物のいない世などあるうか  
「髪はふだだね」とくすぐる美容師さん褒めているのかおちよちよらなのか  
強風波浪警報発令中こんな小気味よき一日がある

一つだけと思ひ定めてスパーへ気付けばリュック一つの重さ

## 坂上直美

真冬

・天

空曇る春は名のみの季のなかひとりの部屋に書を読みすすむ  
雪降れば白く明るき窓の外 湖の姉に恙あらずや

霏々という言葉を辞書に引きみれば涙を流すさまにも言う  
雪霏々と山々なべて白に消ゆ老いたる私の明日も見えず

明日のこと明日考えよう風の中スカレットはまた立ち上がる  
失える時取り戻す術もなし ならばよ我が目明日を見据えん  
問われたり「老驥伏櫪」なんぞやと直ちに答う「志在千里」と

## 坂出裕子

花

・洛

白梅の蕾ふくらむもうすぐに春が来るよとささやきながら  
マスクして道を歩けば聞こえる声もすくなくしコロナの街は  
立ち話す人もなくマスクして黙し行き交ふ市場への道

「只今」と声かけくる見知らざる学校帰りの小学生が

「お帰りと」火よろこびで返事する孫よりもつと幼い子等に  
朝毎に窓辺に立ちて見上げる花の水木のつぼみふくらむ

もうすぐに春が来るよとささやいてくれているやうな気がする花が

## 佐藤道子

芥

・甲

ワンチャンはうんちを一つ残すだけ地球を汚すは人間ばかり  
ブラ芥生芥燃える芥毎週芥の袋が並ぶ

福鳥を忘れて原発再開の話が始まる人の愚かさ

ヨークシャテリアと思へぬ程に毛を刈りながら飼主さんはきれい好きらし  
小さなラリちゃん毛が無くて震へながらに朝の散歩す

朝会へば耳伏せ尻尾を振りながら小さなラリちゃん駆けよりに来る  
一瞬に傘が毀れてしまひさう一月の散歩に東風強し

## 柴田登志恵

青よ

・天

二歩三歩あゆみ青鷺立ちどまり川辺にはかに幽玄の界  
イメージが青鷺となり生きをりぬ何か彼かはよくわからねど  
青鷺の仰ぎ見る空をあをく飛行機雲が一本うかぶ

背高き枯れ草のなかに立ちすくむ青鷺何を恐れをらむか  
おそらくは思考無縁の青鷺の哲学案ずるがごとき風貌

まぶしげに朝日へむかふ青鷺はときをり翼ひろげ飛び立つ  
たれかれに青よ青よと呼ばれつつ青鷺街と異界行き来す

## 関根榮子

蜃気楼

・埼

ふと庭に目をやれば白梅咲きておりこのひと月に気づかざりしよ  
矢のように過ぎしひと月何事もなき日々がどんなに幸せだったか  
あの世とは宇宙のいずこそこの世から去りし夫を思うときのま  
朝刊の一行に目を凝らしおり「生は蜃気楼・死は確実」の  
車椅子を返却したりまた一つ夫にまつわる物消え去りし  
夕ぐれは何故に深くくるものか喪失感また寂寥感も  
今日もまた目白来ており紅椿春を先取り咲き出しており

## 関根和美

義のひと

・崎

## 滝田靖子

世界地図

・新

苦しみのなかりきれいのメールありて「死の魔に勝った」と言いたるに嗚呼  
亡きあとも歌集の感想家族へと届きては増すかなしみならん  
来る年の大会予約成しおえて帰途はバラ咲く道の辺をゆく  
見せばやな集える友に邸宅のバラは五月を咲きほこりいる  
大会の計画と歌集の出版と矢継ぎ早なり急ぐ日々なりき  
編集の帰途の車中は尊かりき信仰たがえど義の会話あり  
これよりはひとり北へと帰りゆく青き車両に揺られるままに

## 高尾恭子

ひらの寄席

・大

木戸銭は千円ぼつきり出囃子の太鼓合図に常連が沸く  
おかつばの二葉ファンが盛りあがる寒の戻りの区民会館  
固有名詞とうに無くしたジャンパーの背を寄せあい団塊つどう  
真打ちに待ってましたと声かける親爺かつてはゲバ棒振りき  
スクラムも立て看も消え造反の口を閉じた世界は縮む  
あの頃は家出娘にあこがれた寅さん節がレトロにひびく  
寅さんは帰ってくるな非正規が二十四時間うつむいている街

## 高津砂千子

春一番

・雫

ニユースにて四月の陽気と伝えるる如月の庭息子がとどのう  
花もてるローズマリーがのびやかに庭に揺れおり唄うがごとく  
腰痛きわれに代わりて庭仕事なしゆく息子を縁よりながむ  
すいせんの香りよ届けふくいくと雛の祭りの近づくからに  
庭くまに咲く水仙のところまで歩をすすめつつ春の気を吸う  
香りよきローズマリーをこまやかに刻みてゆきめ鬱払わんと  
春一番吹く庭の面に水仙の花ゆらゆらと揺れてやまざり

その国がどこにあるのかも知らなくて今さら世界地図買つてゐる  
病む人に送る手紙の書き出しに悩んでゐるうちに半月過ぎる  
先生の米寿を祝ふ会といふ名目の生存確認の会  
先生より先に死ぬかもあななんて嘘でも冗談でもない顔で  
退職の後の昼間を自由にも無為にも過ごすわれら前期高齢者  
武器を売る国へと変はりゆく日本に退職の後を無為徒食にわれら  
日本は戦争をしない国といふ幻想の中に生きるこれから

## 田土成彦

今日明日

・宙

古写真のこの人もあの人ももう居ない生きると言ふはかういふことか  
昨日今日を明日に延ばし締め切りのストレスに今は耐へる他ない  
仏陀より永く生くればそれなりの悟りがひよつとあるやもしれぬ  
戒名も墓も不要と決めしより身の置き所軽くなりたり  
夕園にいたく優しく灯のともりもう六十年も母に会はない  
堤防の土筆の顔を出すころとふと童心の思ひ出されて  
雁たちの北へ旅立つひとと連ね冬の波瀾をしかも越え行く

## 田土才恵

鳴

・宙

みずうみの濁れる水の底居より育つ小魚民を養う  
みずうみのたゆとう水のひろがり包まれゆける黄昏のなか  
みずうみの畔に宿れば波の音たぶりとひねもす夜を  
湖の水の濁れざるわけ知れば膨らみゆける小さなロマン  
たゆたえる波音いつしかとつぷりと湖包み開にのまるる  
飽きることなき波音と風のな水面の鳴も私も揺れる  
極寒の夕へ水面に竿垂れて人は動かす湖面吹く風

玉井綾子 卒業間近 羊

カレンダー張り替えること年明けて息子は替着え外へ踏み出す  
いつまでに決められるのか分からぬと言う中三の子と散歩する  
「焦らない」「がっかりしない」と心して動き始めた子の手を握る  
子の部屋を整えんとする日曜日 吾の雑誌の始末で終わる  
吾の休みに息子と学校見学す彼の気持ちを追ひさせて  
高校を迷う子の目につぼみあり引きこもっていた師走は去年  
日中に居間にいること増えてきて息子は中学卒業間近

中島央子 一月 森

葉を落とし剪定すみし銀杏の並木一月の風にその身をさらす  
一月の雨に濡れたる山茶花は咲ききらぬまま散りはじめたり  
おしめりの少なき冬か手も足も乾きにかわく唇も眼も  
夕暮の川面飛びゆく川蟬に今日の屈折たちまちに消ゆ  
マイナスの思考ばかりが巡る夜夫の享年弟の享年  
曾孫はスマホを持ちて大騒ぎ屈託もなし「ナンタコレ」  
夜半過ぎて鉄橋渡る貨車が行く眠れぬ床に余響残して

永田進一 丙午(2026年)春 山

丙午八百屋お七の物語 高市早苗の解散戦略  
NHK日曜討論トクキャンで高市総理は岐阜で遊説  
トランプの高市支持はごく自然小躍りしている画像を見れば  
氷上に笑顔弾ける十七歳トリブルアクセル長谷川帝勝  
日本勢メダル獲得過去最多ミラノコルティナ冬季五輪に  
わが庭に山茶花、水仙、梅の花清しく咲けば春の訪れ  
大相撲結びの一番取り直しわが人生も取り直しあれば

永塚節子 午年 銀

職員の手配りに安堵しつつ書類提出きさらぎの尽  
重き荷を下ろしたる後の心ゆるみ河津桜と呼ばれたような  
濃き色の桜の裏に潜みいる魔性のとききを垣間見たり  
暗闇を照らすは灯りにあらずして友のひと言今し肯う  
擦り切れた皮の表紙が物語る帰りは来ぬ時間の重み  
もういいやくれんぼの鬼残されて廻り探せどだあれもない  
予言など信じぬ我に年明けより悪事の続くひのえ午年

仲西正子 仙台平 沖

隣り家は更地となりて青草の中より飛びたつトノサマバツタ  
更地にはあまたの青草息づけり分けて摘みとり莖草を干す  
この更地艦砲池の名残りにて雨続く日は水溜まりなす  
戦さ世に突如あらわる艦砲池なみだをためし眼も映してか  
わが縫いし仙台平の紐結び初吟会へと夫は出でゆく  
八十一歳立ち安よしわが夫の仙台平の衣摺れをきく  
綻びし仙台平に力込めひと針ひとはり整えていく

中村博子 正月の日々 漣

「空性」とう言の葉知り初め梵語では「空」の意味にて「くうしょう」と読む  
正月の「ことばを紡ぐ会」へ来て知らぬあれこれ教わりおりぬ  
力不足なれど地域の友らの歌添削するも脳活性や  
学びつつ言葉を紡ぎ終えるかな小雪舞うなか火照り歩める  
和邇駅にランチの約束延期するニュースたびたび大雪警報  
会う度に誰にでも言う「八十年代最もハッピー」また言いおりぬ  
衆し気に暮らすわれ見て天国の父ははホッと安堵の笑まい

西堤啓子 熟柿 天

福田庸子 縦書き 今

初めての町に一步を踏み出して海までの距離たずねれば 雪  
イメージの地図翻り反転の海遠ければ渴いてラムネ  
夕空にザボン文旦照る庭の白壁に影落としてひとり  
旅という越境に身も洗われて夕日に続く豊饒の道

脱臼のことは投げれば隠れ岩波の下からあらわれて鳴る

揺さぶればあまたの木の突降るようにわたしを揺らし言葉を拾う  
これからは熟柿のようにやわらかくそっと世界にひらいていたい

浜谷久子 血縁 地

藤澤一元子 ひな祭り 鳩

近年は旧正月を届く餅母方遠縁母亡きあと

餅搗きは家族総出の楽しみと幼き日を知る兄さまの声

自家米の杵搗き餅のまるまると真白のひかり箱をこぼれる

何代もの血縁脈々繋がって父母と暮らした私の代まで

盆正月郷愁はるか遠縁の絆も互いの次代は知らず

受け入れ先思案の「白秋全集」と「夕暮全集」書棚に永く

自らもめぐりも交わりゆくばかりがたりごとりと厨の夕べ

楢垣美保子 春 鳥

藤田美智子 深き森 新

手のひらに燦売のかたちととのえて春のしるしのみどり一粒

申し訳なきほどの平和 朝食を済ませて夜の猷立思案す

かいまきにくるまれきたるみどりのごとく翅のいだく白菜

競い合う夏過ぎ語らうように立つ土手の二本のメタセコイアよ

少年が少年に送る「カメハメハ」波動念力春風はなびら

ドアフォンの画面にうつる少年はここにこゝと「ニコ」と呼ばれる

軸のなき地球儀は棚に飾られて北極の位置にニッポンがある

冒険のできぬ身なるを心得も雪上に立てば風を切りたき  
水を生む山が火事なり強引に造りしダムは水無きままに  
ダム底に溜まりし水の乏しきを山燃え続く南摩粟沢  
結論を急ぐ世とならぬ人間の怠け心をA-Iが笑ふ  
何事も急ぐ今の世に抗へり縦書きを貫く私の心情  
風にとけて届く爆音街道を駆けぬけて行く真夜中の主張  
亡き人の遺しし本の放つ香に冬あたたかき如月の日日

そを聞けば何ゆゑかなしスーパードにひな祭りの曲今日も流れて

三歳のわがひな祭り疎開先に届きしひひなの首折れ手折れ

六歳のわがひな祭り祖父さまより三人官女とお道具とどく

幼き日子のひな祭りせずなりき多忙にかまけ そをいたく悔ゆ

誕生日さきさき晦日「衛青と霍去病」の音訳佳境

今し方教科書読みるし少女らは瓦礫の下に ああまた戦争

いまま悔ゆ夫の旅立つ前の夜「付き添ひたし」と言はなかりしを

避難先にこぼしし言葉のつぶつぶの拾はれぬまま転がりてゐる

深き森に消えたるごとしふるさとに戻れぬ二万三千人は

取り出せしテプリは〇・七グラム残りの単位はグラムにあらず

浜通りを（被災地）と呼びいつよりかわれはすつかり外側にある

「あの時は大変だつたね」で済ませてるわが頬を撫でてゆく春の風

店の名のごときサイカドウいつよりか耳に慣れきて三月となる

切実な思ひはあるか原発を詠む三月に問はれること

本元由美子

桜草

岡

三浦好博

地球展望台

銚

桜草のピンクが占める縁側で珈琲を淹れ生きること識る  
春寒につほみ膨らむ沈丁花妖しき香りに初恋かへる  
きのふけふ裏山の鳥さまねけり ふたり住まひの鄙の里  
酒々と流るる春の小川を見てれば地球の今ぞ切なかりける  
夫の吹くオカリナの音に春は来ぬ今日のニュースはイラン攻撃  
瑠璃の星野に咲く春となりにけり母待つ里に 子よ帰りませ  
山寺の会場の祭りが春を呼ぶ 老若男女は護摩の火渡る

牧 雄彦

未来なほ

大

三木まり

律

昴

うつうつと気の暗れぬ午後早春の川沿ひの道枯葉踏みゆく  
川沿ひを歩めるわれに手を振りてバギーカーの子は行つてしまひぬ  
堤防の積もれる枯葉のあはひには小さき緑の萌え出づる見つ  
介護施設のポスターの角がはがれるて風にはためき夕暮れ迫る  
未来なほわれにありやと自問して淀みに浮かぶ鴨を見てゐる  
家族らし子鴨も混じり町川に浮かべりかけがさ波に揺る  
町川に沿ひて歩めば堰落つる水の音にも春の気配す

松本多摩子

娘と二人

桜

宮本靖彦

阪滋重奈

凌

頭出す富士を見下ろし娘と二人楽しき旅の始まる予感  
スタジオのうしろは淡い春の花短い選挙論戦はげし  
出始めた草抜く朝細き根はあまた集まり地下に潜めり  
眠られぬ夜は眠剤飲みねむる明日に疲れを残さぬくらし  
田も墓も埋れて白し雪国のわれは旅人苦勞は知らず  
まだ二月四月半ばの気温とぞ暑き夏来る危険な予感  
久々に聞く雨の音じゃぶじゃぶ大地うるおす恵みの雨は

砂丘行く我の姿の少しづつ小さくなりて消えるまで見つ  
今我は世界の中心に立ちてゐる地球展望台にまあるい海よ  
嫉妬深い女のサガの保身かな「奥様によくしく」をみな言ふ  
雪が降るあなたは来ない旅人として犬が行くなり  
東京に見し後パリに行きて見しモナリザさんに笑はれたりき  
友の骨を拾ひたる後御不浄に生きてる我は排泄をする  
無念やな蛸蚪よお前ら鸞掩に喰はれる為に生まれ来たのよ

手を消毒、マスクを着けて深呼吸 母の部屋は聖域なのだ  
ラジオからピアノの旋律軽やかに流れて母の部屋を満たす  
言葉という記号を手放し母はいま空の風になって旅する  
きつと何か訳があるはず寝たきりの母が抗う何かにつけて  
意思疎通を手放して母は高く遠く宙を見ている春はもうすぐ  
夜更けて音のみで知る風と雨二ヶ月早い春の嵐よ  
寝たきりの母のひと日が穏やかに過ぎれば祝福 鳩時計が鳴る

白椿塀にこぼれ咲く早春の歌の集ひに急ぎ歩めば  
夕空の星の光に坂あふぐ点在の家に灯の凍る見ゆ  
幾度か登りし湖西の武奈ヶ岳今雪被るを車窓に眺む  
阪・滋・重・奈一日にめぐるお得旅北雪南梅車窓より覽す  
寒とふ無縁の痛み一万歩歩きし足の夕べに覚ゆ  
しよば降りの雪味はまむと街ゆけば半白の露地に子供球蹴る  
早咲きの椿紅花迎春花一度に開きさ庭にきはふ

## 三好聖三 不肖 伊

群れなして鶴が一樹を揺らしおり朝々蜜柑を食べ尽くすまで  
無言とはハシビロコウのためにある微動だにせず怒るようにも  
戦争も選挙も気分この国のさもしきところあらわに春は  
きさらぎの中ほどにして梅安の仕掛けを視つつ夕飯を食う  
毒婦なら岩下志麻にまかせなさいとくと演じてくれますからに  
死ぬときはあつさり死んでと妻は言いはあなるべくしかるべく  
たくさんの猫らと一緒に歩けたらなど思いおり春のひと日は

## 御代田澄江 春立ちぬ 茨

雪国の便りは寒し雪降ろし中なる事故の多発も悲し  
日立紅寒桜一足先に春呼ぶ開花一月十三日ほろほろ紅色  
万両の実山茶花の花も食す鳥ヒヨもメジロも吾が庭の客  
コルティナの冬季五輪のスノーボード、ハーフパイプ縦回転UFOの如し  
母よ今日結婚記念日と子に言はれ主亡く寂し 雪降る二月十日  
春立ちぬ光の眩し清々とかつ肅々と生きゆくのみぞ  
大谷翔平ワールドシリーズ連覇為し妻娘犬にまで感謝とふ爽

## もとむらしげと りくりゅう .そ

排斥の言葉呑みつつ日の丸に昂ぶる己を許しておりぬ  
どの国の選手も励ます解説者スノーボードが上空に舞えば  
絶望を見たる昨日を振り捨てて舞い始めたるりゅうの決断  
音楽が終わるりゅうの頭を掲げたるりゅうの両目に溢れる涙  
りくりゅうのりゅうの頭を抱きしめるりゅうの優しさ氷の上で  
形容の言葉なければ解説はすこいすこいと絶叫したり  
万雷の拍手を浴びて振り返るりくりゅう宇宙一番の演技

## 桃原佳子 心安らく 沖

永すぎるひどすぎる冬霜やけの両手にたっぷり軟膏を塗る  
カーテンを開けて暗ければいくぶん心安らき一日始まる  
余寒なお続くこの朝に白や黄のビオラの花が庭に咲けり  
庭隅の金柑の枝に目白らの風のごと来て風のごと去る  
十カ月も孫との暮らしやるせなしようやく娘迎えに来たり  
菊の芽も牡丹芍薬の芽も伸びて春の夕陽が淡く射し初む  
まばらに咲く河津桜のピンク濃し土手下染める菜の花の上

## 山野幸司 水俣 沖

胎児性水俣病の忍さん還暦を越え聞い続く  
水俣と向き合い続く忍さん六十八年ただ愛に満つ  
水俣の傷負いしまま世に生きし患者あまたは置き去りにされ  
一枚の紙に描きし君の絵の色は自在に音楽でたり  
深き開抱きしままに宙を行く地球の上の我等は塵か  
雨の前必死にユニボ操りし友は右へ左へ田んぼを走る  
田んぼ掘り上げるユニボぬかるみに疲れ怒りの音は激しき

## 山本 孟 入院 .大

かけ込みし医院は病院へ電話せりわが腹痛の処理一大事  
手術して痛く動けず天を向くベッドに悶悶泥沼深し  
をやみなくなつきに湧きくるフォークソング眠れぬベッドの体に流る  
四階の病室のぞく月ピエロ ベッドのわれへ泣き笑ひの面  
痛み耐へなづきに夢想の回転木馬天国と地獄が何度もめぐる  
信仰を持たざるわれは痛むな短歌にせむとて言葉をさぐる  
助けくるる神のなければ痛み耐へ「人を愛する人は心清き人」くり返す

## 養学登志子

手鞠

・凌

春の土やわらかくして一枝の椿を挿せりのぞみのひとえだ  
 幾年目に苔の先の紅を見む共に生き来しとなりの椿  
 春からの塗装工事の長びきて部屋に待機す植物絶えだえ  
 沢山の苔を落とし葉を落とし目を浴びる日のあわれなる姿  
 パレットに絞り出されし赤の色ゴッホは何を描きたか  
 タンボールの捨てたるに難き色糸の手鞠となりてその美を放つ  
 ピラミッドのそれより昔が見出されそれよりもつと昔ありとう

## 横田敏子

本田昌子さんを悼む

・福

一月に届きし歌は便箋に必死に書かれた「右手が動く」  
 驚きて電話をすれば転倒し肋骨打ちしとようやくの声  
 「大丈夫右手が動く」と気丈なる本田さんなりひとまず安堵す  
 震災と続く水害に遭遇しグループホームの生活の長く  
 外出のままならぬ日々も何のその命あふるる歌を詠まれき  
 突然に「この電話は使われておりません」ともう届かない本田さんの声は  
 歌のこと話弾みて楽しかりし本田さんのあの声はまほろし

## 阿藤たつる

あした

・伊

ヒロインを仮装する人の決断は底にあしたの奴隷眠らす  
 数寄屋橋の街真車に立つ赤尾敏のまほろし見つつジャンボくじ買う  
 洞窟に砂礫をまさぐり這う夢の飢えと渴きが舌に残れり  
 雪の夜さくらももこを思いつつ信州佐久の「ともぞう」を酌む  
 背後よりひかりは近づくと明日とはあなたの前に横たわる影  
 礼服に締めるネクタイは黒ばかりどこにゆきしか白ネクタイは  
 片手あげ一礼ののち去りにけり眼のひかり眼鏡に還し

## 石塚貴美恵

椿

・地

兄の手に渡った実家気軽には帰れぬけれどもどこかに安堵  
 私には維持のできない時が来る仏前の母のつぶやき残る  
 一昨年植えた畑の球根は地主かわれど芽生え始める  
 片づけをすれば心は乱れ出すあちらこちらで拾う思い出  
 あの抽斗この抽斗と確かめるメモや写真に残ってないかと  
 命ある庭木をなで感謝する母亡き後も変わらぬままの  
 小学校の卒業記念の椿にも別れを告げる元気でいてと

## 泉嘉穂子

男鹿なまはげ

・森

男鹿の海波にびいろに盛り上がり風ごうごうと波の花満つ  
 うみ風のはだに刺さりて行きなすむ入道踏の灯台はそこ  
 横なぐりに吹きくる雪はつぶてなりいちめんの自行く手にまどう  
 雪原のおぼろにかすむその先におおつこもりの日本海見ゆ  
 おらびつつ四股をいくとも踏みならしなまはげ来たり衰をゆらして  
 なまはげが迫り立き出すおとうとにあねは顔上げひさをくすさず  
 ふたたびの四股ふみならしなまはげはわれのなまけをとがめずに去ぬ

## 磯田ひさ子

一代

・森

執筆の妨げになると抗癌剤こぼみて逝きし青井史思ふ  
 みづからの世界を広げ青井史 妻も職業の一つと詠みき  
 限られし命の怖れ深かりけむ原稿用紙に向ひたる夜々  
 肺癌の不安を鎮め鉄幹を「鬼に喰われた男」と書きし  
 大き目の顔立ち凛しき立ちあげし結社を一代と閉ちて逝きたり  
 大島の袖を深く合はせたる胸に納めしや餌餌のもろもろ  
 身の痛み心の痛み抱へつつわがことなれば人は黙して

## 市原やよひ

『海的光』

・萬

## 奥田陽子

雪来る

・羊

初めての私の歌集届きたり開けるまでの動悸激しく  
出で来たる『海的光』手に重し不思物体見ているような  
まず夫の遺影の前に置く「私の歌集が出来ました」  
夫の日の何か言いたげしはらくは無言の会話一方的な  
賜りし胡蝶蘭今輝きて横に光れり『海的光』も  
『海的光』見し孫一瞬ことばなく信じられぬといいたげな顔  
ばあちゃんのもう一面が見えたかな驚く顔のただ嬉しくて

## 梅本武義

満開の梅

・羊

## 久我田鶴子

悼・藤森巳行

・羊

八時間眠り起きるは久し振り今朝暖かし梅が満開  
何となく今日は良き日ぞ満開の梅に目白をしばし眺める  
まとまりし雨がようやく山陽に里の小川のさらさら流る  
小川沿い二千歩あるく畦作りする人を目にそよ風耳に  
我の持つすべての資格の講習を受けることなく十年が過ぐ  
若者に大負担かける老人の一人となりて病院待合  
はや四年まだ三年とウクライナ思いて憎しブーチン・トランプ

## 大浪美雪

太ふと

・森

半年に一度の検査わが喉の奥をあかあか内視鏡ゆく  
梃子の原理教はりてより七十年初めて庭の石を動かす  
冬の陽は低き角度に射し入りぬ机のほこりしろじろと見ゆ  
冬の虹鉄塔の上に太ふととクレパスをもて塗りたるやうに  
信号の背を滲ませ景の消ゆ濃き霧のなかわれを探しぬ  
ひとわれの目を楽ませ目白二羽梅の香満つるなかに遊べり  
雪の中赤く灯るは花なるか実生の椿ひとつ開きぬ

転移ありステージ4を笑ひつつ語りてみせし藤森巳行  
検査結果知る翌日の会議なりきいつも以上の強さに声あり  
抗ガン剤治療の先に待つものを生とも死とも闘ひぬけり  
地中海の藤森巳行は熱血漢はげしくもの言ふときもありしを  
小野茂樹にひとたび会ひしを忘れ得ず集団疎開の寺をも訪ね  
信仰に加へて短歌のありしこと何より家族に愛されしこと  
無名とか無冠とかいふ棄てられぬものあるこの世のその先へゆく



## 激情家・小野茂樹への親愛の念

—一九七〇年、失踪前の岡井隆のことば—

一九七〇年の歌壇の出来事として、小野茂樹の死去（五月）と岡井隆失踪（七月）がある。この二つに関連はないと思うが、岡井は「未来」七月号の「百歌奏鳴6」で、小野の「あの夏の……」の歌を取り上げていたという。

吉川宏志著『一九七〇年代短歌史』（二〇二六年一月刊）にそのコラムの紹介があり、「短歌研究」に連載されているときにも読んでいたはずだが、あらためて岡井隆に関する認識を修正される思いだった。

七月号に掲載ということからすると、五月七日の小野茂樹の死から間もない頃に書かれたものらしい。そこから吉川が引いているのは、まず小野の葬儀の場面である。

「おの、おのしげき、しげきよ……」半分泣きながら、申辞のなかで呼びかけていた香川進氏の肩が想い浮かぶ。多分、あの「たった一つの表情をせよ」と叫びたかったのにちがいない。34才。交通事故死。運命って奴をこっちからぶんなくってやりたい気がする。

香川進の嘆きを記しつつ、岡井自身の気持ちもストリートに表されている。だが、吉川は「岡井が書きたかったのは、むしろ別のところにあった」として、次の部分を挙げる。

今度『羊雲離散』を読みかえして、「棘ある垣」「川苦しまむ」のあたりの愛故の苦しみに強く惹かれた。恋人がなにかあやまちをおかしたらしい。どのみち他者には些細なことなのだろうが、男にとっては死ぬ苦しみだ。

岡井は『羊雲離散』から作品を挙げ、文章はこのように続く。

……一巻の水準からみて、この辺りは下手な部類である。にもかかわらずぼくの心を惹くのは、小野茂樹の激情家なるを知り、あらためて親愛の念をつよめたからなのだろう。故人にむかって親愛の念をいまさらふかめたって何になるというか。むろん、何にもなるまい、ならなくたっていいじゃないか。

「地中海」一九六八年七月号の『羊雲離散』の書評には、恋に苦しんできた自分と小野との違いとを末尾に書きつけた岡井であった。「しかし、『羊雲離散』を読み直したところ、小野の歌を全然読めていなかったことに気づいた。その後悔の思いが、この文章を書かせたのだろう。」と吉川は推測している。

一九七〇年七月二十五日、四十二歳の岡井隆は妻子を残したまま突如失踪。同じ職場に勤務していた二十歳の女性と恋に落ちたことであった。

※吉川宏志著『一九七〇年代短歌史』（短歌研究社）

「久我田鶴子・記」

## 今月の二人

### 父の笑顔

鈴木いく子

九十九里の七福神を新春に地図を頼りに足取り軽し  
山門に梅花ほころぶ神めぐり厳かな境内お香漂う

稲作の準備の畦をつくりいる老いの背に満つ立春の陽よ  
おしげなく桃の大枝剪りくれし節句祝える父の笑顔が

しらじらと冷気たちこむ利根川に白子漁しらすりようする夫婦船見ゆ

川土手に白子漁おえ漁師らの網ほす声の朗らに響く

台風以利根の河口は増水し犬猫連れて子らは我が家へ

利根川を詠いし歌友よ吾もまた大河の流れの一滴なりぬ

新緑の穂高に雲の湧き立ちぬ河童橋より稜線あおぐ

上高地を描き続けて六十年友を訪ねればキャンパス見事

友と行く白河の街歩をとめる芭蕉の句碑に風花の舞う

夕焼けに母のような雲うかびそつと手を振る明日も佳き日に

たそがれの遠き山並み朱に染まり沈みゆく陽に今日を感謝す

利根の畔に生きる

「今月の二人」の原稿依頼に、私のような者がと恐縮し躊躇しましたが、私の入会してあります東庄町短歌会の三浦好博さんのご指導の様子が浮かび、承諾させていただきました。我が家より悠々と流れる利根川が望めますが、時に台風の去った後は濁流になつたりして恐ろしさを感じた時もあり、私はこの流れのさまを人生に重ね、私も大河の流れの一滴と思えるのです。

縁があり隣町の東庄町短歌会に入会させていただき、短歌を通じて知り合った心から尊敬できる先輩達、歌友の皆さん、短歌ばかりでなくお料理の事、人生の教訓等、未熟な私にとってすべて掛け替えのない宝となっております。指導者の不在でした短歌会のご指導を三浦さんにお願ひし、三浦さんは丁寧に一人ひとりの作品の添削例を示して下さい、どの作品もこういう表現になれたらと思うばかりです。拙い私の作品に地名を入れる、字余り字たらずに注意するようにと、そのご指導に心より感心し感謝いたしております。「地中海」に入会させていただき、歌作りに励み歌友の皆さんと楽しく詠う事が、心の拠り所となれたらと願っております。